©海事プレス社2026 禁無断転載

地理的優位性や海事サービスをPR

■アルヘシラス港、デジタル化・脱炭素化加速

スペインのアルヘシラス港湾コミュニティと駐日スペイン大使館経済商務部は28日、都内でスペイン経済セミナー「欧州物流の未来を拓く～アルヘシラス港」を開催した。ジブラルタル海峡に面し、欧州とアフリカを結ぶ戦略的立地や、世界銀行などの「コンテナポートパフォーマンスインデックス2025（CPPI2025）」で世界12位となった効率性の高さ、充実した海事サービスなどアルヘシラス港の優位性をアピールするとともに、デジタル化や物流インフラの革新、脱炭素化とエネルギーハブの形成に向けた最新の取り組みを紹介した。

アルヘシラス港は総貨物取扱量が1億トン以上、コンテナ取扱量が約500万TEUを誇る南欧州のハブ港。コンテナターミナル（CT）には、マースクグループが運営するAPMターミナルズ・アルヘシラスと、HMMとCMA-CGMが出資するTTIアルヘシラスがある。TTIアルヘシラスでは現在、拡張工事が進捗中で、28年にコンテナ処理能力が210万TEUへと増強される予定だ。

ハブ港として船舶燃料の供給拠点にもなっており、近年は次世代燃料のバンカリングにも力を入れる。昨年は欧州3位のLNGバンカリング港として、33万立方メートル以上のLNG燃料を供給した。足元ではグリーンエネルギーハブ戦略を進めており、今後はグリーン水素やメタノール、アンモニアの生産・供給に必要なインフラの整備を加速する方針だ。陸上電力供給設備の導入やデジタルトランスフォーメーション（DX）も推進していく。

セミナーの冒頭、イニゴ・デ・パラシオ・エスパーニャ大使と国土交通省の寺田吉道国土交通審議官があいさつ。寺田国交審議官は、「国際物流ネットワークがダイナミックに変化していく中で、安定的にアジアと欧州を結ぶ物流回廊の重要性が高まっている。将来的には日本とアルヘシラス港が直接的に国際コンテナ航路でつながることを願っている」と述べた。


スペイン・アルヘシラス港の利便性を説明した

国際港湾協会（IAPH）の古市正彦事務総長は、国際海上輸送ネットワークの現状と対策と題して講演。近年のコンテナ船の大型化の進展によって、港湾への負荷が高まっているとし、現在もコンテナ港湾の混雑やスケジュールの混乱が問題になっていると説明した。「リスクが発生した際のリダンダンシーやレジリエンスなどを持った港が船社に選ばれる港になるだろう」と話した。

マースクのマレク・ベニチャク北東アジア地区オーシャン&CPM部門責任者は、ハパックロイドと展開するジェミニ・コーポレーションによるハブ&スポーク型のコンテナ船サービスネットワークを通じて、環境変化に適応していると紹介した。近年は港湾の混雑やコンテナ船スケジュールの遅延が課題となっている。ベニチャク氏は、「状況が変化した時に迅速に対応し、顧客を支援できる俊敏性を備え、ネットワーク全体としてレジリエントで信頼できる状況を維持することが重要だ」と話した。アルヘシラス港については、「ジブラルタル海峡に位置し、東西航路の要衝となっている。ハブ港の戦略的価値は地理的優位性や港湾の能力、接続性の組み合わせにあり、こうした条件を備えるアルヘシラス港は今後も戦略的な重要性を持ち続ける」と述べた。

ペニンシュラのナチョ・デ・ミゲル・LNG・代替燃料・サステナビリティ部門責任者は、今後は多様な燃料を活用する「マルチ燃料の時代」になると指摘した。LNG燃料やバイオ燃料に加え、将来的にはアンモニア燃料などの活用も進むと予想される中、「ペニンシュラとして、顧客の温室効果ガス排出量を直ちに削減することを支援すると同時に、未来の燃料に向けた準備も進めていく」方針だ。「日本のパートナー各社との関係も大切にしており、脱炭素化に向けて現実的かつ長期的なアプローチを共有していく」と述べた。

その後、アルヘシラス港湾コミュニティのホセ・マヌエル・テヘドール会長と、アルヘシラス港湾局のヘラルド・ランダルセ会長がアルヘシラス港が提供するサービスや戦略について説明した。セミナー後にはネットワーキングレセプションも行われた。

今回来日したアルヘシラス港訪日経済ミッションは、船舶の修理や船用品の供給、電子機器関連、燃料供給、代理店業務といった、船舶向けサービスを提供する企業が中心となっている。